

2017・平成29年センター漢文解説(本試験)準拠『早覚え速答法』

※¹は『早覚え』マニユアルの1ページ、174は『早覚え』の174ページ、40.8は問題文40ページ8行目を示す。

【出典】『白石先生遺文』。著者の新井白石は、二度の浪人を経て、学才だけで六代將軍徳川家宣の側近となって改革をすすめた。改革の姿勢は激しく、政敵から「鬼」と呼ばれたほどだが、家宣の子家継の死後失脚し、著作に励んだ。

古文で出題される『折りたく柴の記』は白石の自伝。題名の「折り焚(た)く柴」は、承久の乱に敗れて隠岐島に流された後鳥羽上皇の歌(柴を燃やす煙にむせびつつ思い出にふける)の一節。

【書き下し文】※音読のためルビと送りがなの歴史的かなづかいは今のかなづかいに変更。

「比喻による主張」

雷霆(らいてい)を百里の外(そと)に聴けば、盆を鼓(こ)するがごとく、江河を千里の間(かん)に望めば、帯を縈(ま)とうがごときは、其の相(あ)い去るの遠きを以(も)つてなり。故に千載(せんざい)の下に居(お)りて之(これ)を千載の上に求むるに、相い去るの遠きを以(も)つて其の変有るを知らざれば、則ち猶(な)お舟に刻みて剣を求むるがごとし。今の求むる所は往者(おうしゃ)の失う所に非ざるも、其の刻みしは此(こゝ)に在(あ)り、是れ従りて墮(お)つる所なりと謂(おも)えり。豈(あ)に惑(まど)いならずや!

「本題の主張」

今(いま)夫(そ)れ江戸は、世の称する所の名都大邑(だいゆう)、冠蓋(かんがい)の集まる所、舟車(しゅうしゃ)の湊(あつま)る所にして、実(まこと)に

天下の大都会たるなり。而(しか)れども其の地の名(な)たる、之(これ)を古(いにしえ)に訪(たず)ぬるも、未(いま)だ之(これ)を聞かず。豈(あ)に古今相(あ)い去ること日(ひび)に遠く、事物の変も亦(ま)た其の間(かん)に在(あ)るに非(あら)ずや！

【結論】

蓋(けだ)し知る、

後(のち)の今に於(お)けるも、世の相(あ)い去ること愈(いよいよ)遠く、事の相(あ)い変ずること愈(いよいよ)多く、其の聞かんと欲する所を求むるも、得(う)べからざること、猶(な)お今の古(いにしえ)に於けるがごときを。

吾(われ)窃(ひそか)に焉(これ)に感ずる有り。『遺聞(いぶん)』の書、由(よ)りて作る所なり。

※注

者き「――条件を示す助辞。「うば」と読むか、あるいは読まない。

読まない時は、いわゆる「置き字」なので、知る必要がない。

蓋(けだ)しき「――「蓋」以降は一般論や結論なので、改行した。

猶(な)お…ごときをき…――原文の「知る」40.7については、

…を知る。

ではなく

知る、…を。

という言い方になっているので、「き」ときなり。「ではなく、「き」ときを。」40.8と読む。

【現代語訳】○内は訳者の補訳。

〔比喩〕

百里のかなたから雷鳴を聞くと、酒器をたたくように聞こえ、千里離れて大河を見ると、腰に巻く帯のように見えるのは、（現象と観察者が）お互いに離れているからである。したがって、はるかな未来において、その時のことを遠い過去に探し求めると、（未来と過去が）お互いに離れているので、その間の変化がわからない。

それはちょうど、船で川を渡る途中、水中に剣を落とした人が、すぐ船べりに傷をつけ、船が停泊してからそれを目印に剣を探したという故事（現在の問題を解決するのに、過去の事例に頼る保守的態度を非難するたとえ。）と同じである。（今探している場所は剣を落とした場所ではないのに、過去につけた傷はここにあるから、これが落ちた場所だと思っている。（これは）まったくの考え違いではないか。

〔本題〕

さて、今の江戸は著名な大都市であり、身分の高い人が集まり、水陸の交通の要衝でもあって、確かに天下の大都会である。しかし、この地が有名になつたこと（理由など）を過去に探し求めても、よくわからない。（これはまさに）昔と今が日々離れてゆき、物事も同じように、その間にどんどん変わっていく（からの）ではないか。

〔結論〕

したがって（以上の具体的現象から）次のこと（一般的原理）がわかる。
後世においては、時代が今とますます離れ、事物の変化もますます激しくなる（ので）、（後世において）知りたいことを（時間をさかのぼって今に）探し求め

でも、不可能である。それは、現代において過去のことがわからないのと同じだ。

私はこのことを心中強く感じていた。それが『江関遺聞(こうかんいぶん)』を書いた理由である。

※訳注

間き「-----離れた所。熟語「離間(りかん)：人と人を離れさせる、転じて、仲たがいさせる」によって訳した。

江河き「-----黄河と長江。大河のこと。

相(あ)いあ.2「-----お互いに。「相互」という熟語もある。

千載(せんざい)あ.2「-----千年。長い歲月。

之(これ)あ.2「-----」「これ」は指示語。直前の「千載の下：はるかな未来」を受ける。

窃(ひそか)にあ.1「-----心の中で。

【解説】

筆者の主張をつかむ¹¹⁴

ステップ1——最初の2行を読む

「書き下し文」※最初に読んで、わからない所を含む

雷霆(雷鳴)を百里の外に聴けば者(もの?)、盆を鼓するがごとく

江河を千里の間に望めば者(もの?)、帯をまとふがごときは、

其の相い去るの遠きを以てなり。

「者(もの)」「がよくわからない!」「江河」の訳もわからない!その部分を省略して訳すと次の通り。

【訳】

雷鳴を百里の外で聞くと、お盆をたたくように聞こえ……るのは……
その距離が遠いからだ。

ステップ2——最後の3行を読む

最後の行が問題なので、最後から3行目の文を読む。

「書き下し文」※わからない所を含む

後の今に於けるも、

世の相い去ること…遠く、

事の相い変ずること…多く、

其の聞かんと欲するところを求むるも、得(う)べからざること、亦た猶

(な)お今の古に於けるがごときを也(なり?)。

「後の今に於けるき⁸」「今の古に於けるがごときをなりき⁹」はよくわからない！残りだけ訳すと次のとおり。

〔訳〕

時代が遠く離れていて

事態の変化が多く

聞きたいことを求めても、得られない

ステップ3——最後の問6の選択肢を見る

三つのステップで共通する言葉を探すと次のとおり。

ステップ1

去るの遠き(遠く離れている)場所が全く違(う) ^{40.2}

ステップ2

去ること…遠く ^{40.8} 変(わ)ずること…多く ^{40.8}

ステップ3

問6 ①全く違(わ)った姿④変化(へん)が激(げき)しく ※違(わ)った姿①場所(ば)の変化④

ここで一字の漢字は熟語で訳せ。熟語の訳で正解探せ！^ニを使うと、

変まじろ ↓変化④ ↓違った姿①

となっているので、④が、熟語「変化」を使ったヒツカケで、正解は、熟語の意味を残しつつ元の漢字「変」を見せないようにした①だろうかハ。でも無理はしない。

筆者の主張の一部は、①「全く違った姿」か④「変化が激しく」だろう。これで十分。これが大事。ここで最初にもどる。

問3〔注〕〔対比〕〔主張〕

「者」ものはわからないので無視。わかるところだけを考える。

説明・注で正解つかめ!ニにより「雷霆」は「雷鳴注1」。すると

「書き下し文」雷鳴を百里の外に聴けば、盆を鼓するがごとしは、

大きな音の雷鳴を百里離れて聴くと、酒器注2を太鼓注2のようにたたくようだ

となる。ここで、**対比に注意!**ニにより

X 雷鳴ニ大音量

X

Y 太鼓ニ大きい音だが雷鳴よりは小さい となり、

②「大きなものも、小さく感じられる」が正解。「大きな↓から↓小さく」なので、最初の作業でつかんだ筆者の主張の問6①「違った姿」④「変化」とも合致するので、正解まちがいなし。

①③④は「大きい」がない。

問2(1)〔対比〕〔漢〕〔注〕

対比に注意!ニにより

「千載の下40.2」と傍線部(二)「千載の上40.2.3」は、「下」「上」で対比されているから、選択肢は②「過去」と⑤「未来」だろう。

次に、傍線部(1)の文の後半に重要漢字「猶(な)ほ」ごとし「まるで」のよう
だ」¹⁵⁵があり、

Aは猶(な)ほBのごとし…AはまるでBのようだ

A≠B

だから、傍線部(1)を含む一文は、「猶ほ」の前後で次のような構造になっ
てい
る。

A 千載の下に居りて…①千載の上にに求むるに…則ち

≠

B 舟に刻みて剣を求むに注3

したがって、傍線部(1)は注3でわかる。そこで、

説明・注で正解つかめ!¹⁵⁶により注3を見ると

← 船で川を渡る(≡移動している)

← 水中に剣を落とした 例…8時

← すぐ船べりに傷をつけ 8時

← 船が停泊して 例…9時

← それ(8時につけた傷)を目印に(9時に)剣を探した

注3で、最後に「いる」時刻は9時だから、原文で「居(を)る」「千載の

下」¹⁵⁷の時刻は9時。そして、8時と9時では、8時が過去で9時が未来。

そこで9時「千載の下」と反対の8時「千載の上」は②「過去」となる。

傍線部(1)「千載」の「載」を含む、上下ほぼ同じ意味の熟語は「積載」なの

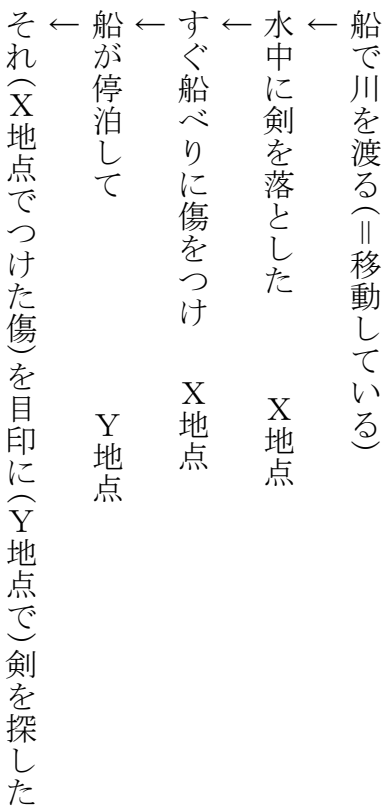
で、③「積み荷」に目が行く。しかし「千載の下」と「千載の上」が対比だか

ら、③「重たい積み荷」は単純なヒツカケ。ただし「軽い荷物」という選択肢

があれば正解の可能性が出てくる。

問4〔注〕〔主張〕説明・注で正解つかめ!・176

設問文で「『刻舟求劍…舟に刻みて劍を求む』の故事に即した説明…を…選べ」とあるので、再び「舟に刻みて劍を求む」の注3を見ると次のとおり。



X地点とY地点で場所が違うので、正解は④「…場所と…場所との違い」。最初の作業でつかんだ筆者の主張の問6①「違った」④「変化」とも合致するので、ぜったい正解。

①の「錆(さび)びていく」、②の「移動したかを調べ(る)」、③の「目印のつけ方」、④の「新しい目印」は、注3から読み取ることができない。

なお出題者は、注3を使って、問2(1)では時間の推移を、問4では場所の推移を問題にしている。問題を解くために同じ注を2回使うことになるが、解答作業では、それほど

説明・注で正解つかめ!・176

を多用する。通常の読解とは異なるが、それが試験だ。

問2(2)〔対比〕〔熟〕対比に注意!・172

傍線部(2)の「舟車」は、「舟」と「車」の対比だから、正解は③「水陸」か⑤「船頭ふねづか車夫(しやふ)」。

⑤は傍線部(2)の「車」を熟語「車夫」で訳しているが、「車クルマ夫」ではない。

一字の漢字は熟語で訳せ。熟語の訳で正解探せ!・174

の原則では、「上下ほぼ同じ意味の熟語」を考えなければならない。上下ほぼ同じ意味の熟語だからこそ、**翻訳**になるのだ。

たとえば「車」の場合、「車馬」ならば、同じ交通手段として「車≠馬」となるので、「車」を「車馬」と訳すことができる。しかし、「車夫(しゃふ)」は車を引く人夫(にんぷ)（放送禁止用語）肉体労働者)なので、「車≠夫」ではない。だから「車夫」は「車」の訳にならない。

したがって⑤が消えて、③「水(上の交通手段≡舟)陸(上の交通手段≡車)」が正解。

問5〔対比〕〔漢〕

傍線部Cの直前の「而(しか)れども」は「しかし」なので、傍線部Cとその直前部は次のような対比だろう。

江戸は^き為^さ…大都会也…大都会たるなり
而^しかし

其の(江戸の)地の為名

すると「為」の読みは「たり」なので、正解は「其の地の名たる」の②か

⑤。
重要漢字「未(いま)だ^らず」「^ひず」は最後に読むので、②「聞かず」はよいが、⑤「之(ゆ)かざるを聞く。」は誤り。⑤が「之(ゆ)くを聞かず。」ならば正しい。

これが瞬時に判断できるかは、「未(いま)だ^らず」「^ひず」の例文を音読して**読みが身についている**かどうかにかかっている。

重要漢字「之(ゆ)く」^ひの読みだけをたよりに⑤を選んだ者は、出題者がしかけた単純なワナの餌食(えじき)となる。

①③「其の地の名を為(な)す」という読みならば、原文は「為其地之名」となる。

④「為(ため)に」と読むならば、原文は「為其地之名」となる。いずれも受験生の能力を超えるので、この設問は、対比を使わないと解けない。

問1

(ア)〔漢〕

重要漢字「蓋」¹⁵⁶は「けだし…思うに」なので、正解は⑤。

(イ)〔ズヤ〕

波線(イ)とその直前直後は、「世の相(あ)ひ去ること愈遠く」。その前に同じ「相(あ)ひ去ること…遠く」^{40.7}がある。しかし、この文は「豈(あ)に…ずや…ではないか!」^{40.7}という詠嘆の句形²³になっている。そこで、7行目と8行目の二つの「相(あ)ひ去ること」が同じか違うかを考える。

詠嘆の「…ではないか!」は

すごいではないか!非すごい

からわかるように、肯定の強調であり、A||Aを強調してA!非A₁となっているのだから、「豈(あ)に」「古今相(あ)ひ去ること日(ひび)に遠く」…「ずや」^{40.7}の意味は、「古今相(あ)ひ去ること日(ひび)に遠く」と同じだ。

そこで7行目と8行目の二つの「相(あ)ひ去ること」は同じなので、二文を並べると次のとおり。

A::古今相(あ)ひ去ること 日(ひび)に 遠く^{40.7}

二

B::世の相(あ)ひ去ること 愈 遠く^{40.8}

「愈」は「日(ひび)に…毎日毎日、日を重ねるごとに」に相当するので、正解は②「いよいよ」。

①「しばしば」も近いが、「しばしば」は「何度も」なので、「毎日毎日」からは少しずれる。

問6〔主張〕〔漢〕

最初の作業で絞り込んだ選択肢は、①と④。最終問題の問6は筆者の主張を聞いている。そこで、

最初と最後で筆者は主張^{三〇}

という原則により、傍線部Dの前の段落の最後2行を読み、

正解は正確な訳で作られる^{三六}

という原則により、選択肢と照らし合わせると次のとおり。

後の今に於けるも^{三〇}

←後^{三〇}後世^{三〇}||今から見た未来

未来の江戸も今と^①

世の 相ひ去ること いよいよ遠く^{40.8}

事の 相ひ変ずること いよいよ多く^{40.8}

←
全く違った姿になっている^①

其の^{40.8}

←其の^{三〇}後^{三〇}||後世の人

後世の人が^①

猶ほ 今の古(いにしえ)に於けるが こと(し)^{40.9}

←猶ほくこと(し)^{三〇}||くのよう^{三〇}だ

(今の)江戸は…昔から繁栄していたわけではな(い)^①よう^{三〇}に

未来の江戸も今と全く違った姿^①(である)

選択肢④は、次のように一部が原文の訳になっている。

求むるも得るべかざる^{6,8,9}

←
見つけるにも苦勞する^④

しかし④は、「聞かんと欲する」^{きこ}を「行きたい」^④にしている。また、「其の(聞かんと欲する)」^{その}の「其の」を「遠方からやってきた人」^④としており、元になる文は原文にない。なんとなくありそうだが、ないものはない。フイーリングに頼る者は得点が伸びない。

なお、選択肢①は原文を次のように訳している。

聞かんと欲する所を求む^{きこ}

二

← 知りたいことを探し求める

← 事実を理解する^①

これは正確な訳とは言えない。しかし、④のキズより軽い。

②「さびれてしまうおそれ」⑤「江戸の風情が失われ」は原文にない。

③は、「今と昔」があっても「後(未来)」がない。傍線部Dの「遺聞」の

「遺」は「遺書・遺産」という熟語からわかるように「(子孫に)のこす」という意味であり、「遺聞」とは「自分が聞いたことを後|の人に遺(のこす)ことである。しかも、「遺聞」は本のタイトルであり、タイトルは筆者の主張である。だから自分の知識をのこす相手である「後」を含まない③は、筆者の主張ではない。そこで③を選んだ者に次の川柳(せんりゅう)をさしあげよう。

ヒツカケは主張をずらして作られる^{ヒツ}

以上